

障害児は不安な子どもの代表者



飛田裕美

本当にいろいろな子どもがいるのだな——保育者になって三年経とうとしている私の、相変わらずの実感である。そして四回目の入園式を迎える新たな出会いを思っ
て、心はまた準備体操を始めようとしている。

入園児の中には、「障害児」と呼ばれる子どももいる。しかし、ひとり育てようとする保育の中で、個々の子どものことを考える保育者の姿勢には、「障害児」についても「普通の子ども」についても、基本的には違いないと思う。「障害児」の中にも、集団のルールに従いながら園生活を楽しむ子どももいるし、「普通の子ども」

の中にも、自分の殻に囚われて遊びに飛び込んで行けない子どももいる。抱えている問題は様々なので、個々に対応した援助が必要であり、それぞれの子どもにも可能性の広がりを持期待しながらかわることに於ては、何の区別もいらぬ。ただ、複雑な問題や、周囲の大きな心配を背負っている弱い子どもが障害児に代表されると見れば、そういう子どもに対しては特に、最も根本的な所での配慮を忘れてはならないと思う。そして、私達の幼稚園でも、模索しながらの実践を進めている。

私達の園では、入園前に二回、「一日入園」という日を受け、新入園の子どもが幼稚園で遊ぶ機会を作っている。子どもの中に幼稚園のイメージをより具体的に描いてもらい、四月の入園の不安を軽減させることを意図する一方、保育者の側でも子どもを観察し、迎える準備の材料のひとつにする。障害児を観察するのは他の子どもと同様で、複数の保育者の目で問題の大きさを予測し、環境づくりを検討する。

また、新入園の子ども・母親と保育者・幼稚園の相互

理解に即効的なのが、家庭訪問である。特に障害児については、入園式の前日に行なった。周囲の変化に敏感で不安の強い彼らには、少しでも身近な所で面識のある人間の存在が、入園時の不安を和らげるのに役立つと思うし、保育者側も落ち着いた気持ちで迎えることができるからである。

いよいよ入園となると、多くの子どもが母親と離れることに不安を感じる。そこから自分の一歩を踏み出すまでの葛藤は子どもによって違いますが、急激な環境の変化を避けて、保育時間を少しずつ延長したり、母親が見守れる場所を設けたりして、子どもの一歩を待つ時期がある。そして五月の始めには、全員がお弁当を食べる園生活に入っていく。大概の子どもはこのペースについて行けるが、中にはどうしてもついて行けない子どもがいることもあり、それは障害児とは限らない。その場合、その子どものペースで適当な方法を考えていくのである。

園生活の中では、子どもとのかかわりは保育者との信頼関係の基盤の上に成り立つが、言葉や行動から気持ち

をくみとることが難しい障害児の場合は、特に重要なことだと思ふ。子どもに、幼稚園が安心できる場所であり、そこには信頼できる人間があると感じてもらえるまで、たとえ一方通行の働きかけでも積み重ねて行かなければならないし、母親との協力体制も築いて行かなければならない。そして信頼関係の生成は、緊張からの解放とともに進んで行くようだ。

漸く安定した園生活の中で、子どもはあらゆることを学んで行くが、やはり共有して行く部分の少ないのが障害児である。彼らに必要な援助や指導を模索する中で、専門知識や経験の乏しい保育者としては判断しかねる問題も出て来る。そこで、信頼できる専門家に相談し、客観的な意見を参考にしながら、園での方針を決めて行く。この時も母親の理解と協力が必要であることは、言うまでもない。母親が心を開いてくれないければ、私達は壁にぶつかってしまう。母親が納得して、日常生活の中でも貫いて行けるような姿勢を見つげるために、相談には保育者・母親・子どもの三者で参加することにしてい

る。

幼稚園の中での障害児の受けとめ方は、子どもによって様々である。避ける子ども・ちょっかいを出す子ども・世話をやく子ども・無関心な子ども。でもどの子どもも、保育者がその子どもとどうかかわっているかということは、よく見ているようだ。そして時には、そのかわりを真似していると思われる姿も見られる。その度に、自分のかかわり方を思い直させられる。障害児に向ける暖かいまなざしは、障害児にとっても他の子どもにとっても、大切なものだと思う。そして、これは幼稚園の中だけのことではないと思う。

(まんとみ幼稚園)

